

(Comptes Rendus, CXXXV. 1902. p. 936-7.)

(飯塚)

●海産滴蟲類の淡水に應化する事

P. Enriques 氏の試験に因れば滴蟲が鹹淡水に對する應化能は種によりて著るゝ相違あり *Euplores charon* 及 *Chilodon cucullus* 等の如き鹹淡水棲のものは鹹より淡に移すもよく生存すと雖も *Euplores harpa* の如き鹹水にのみ産するものにありては生存すること能はず然れども上記同屬の二種の如き交流性 Osmotic property に於ても滲透性 Permeability に於ても少しの相違を見ざるに拘はらず生存能力にかくの如き差違あるを見るは恐らく化學的代謝機能の特異性に因るものなるべし。

●滴蟲の化石

B. Renault 氏は J. Hérault の白堊紀褐炭中より滴蟲の化石と覺じきものを得たりそは *Stephanospermum* の花粉室内に發見せられたるものにして多分この花粉を食して棲息せしものなるべし云々と。

●イソギンチャクに寄生する撓脚類

千八百四十四年 Will 氏が *Anemone sulcata* の隔膜に瘤を造る一種の撓脚類を發見し *Staurosoma parasiticum* と名けたることありし後絶えてこれに付ての研究なかりしが近來 M. Caullery. 及 F. Mensil の兩氏が觀察したる處を聞くにこの蟲の雌は自體に固着せる雄と共に榮養液に満ちたる瘤の内に包まれ其卵はノーブリ期まではこの瘤の内に生長し此期若くは此期の後若干ならずして寄生々活を始むるものゝ如しこの蟲の分類上の位置に付いては不明なり恐らく撓脚類中孤立のものなるべし。

●三崎臨海實驗所日誌の一節(上)

臨海實驗所夏期日誌の全體は、某君(今は名を秘す)とやらが精細に記述せらるゝ由なれば、茲には我輩が滞在して居た時の様子を一寸申上げる次第である、我輩が此實驗所を訪門したのは、たしかに七月の十六日であつて、例の如く靈巖島から、玩具の様な汽船で出發したのである。三崎も今では大學の實驗所もあつて、毎學期立派な御方様(自分も含む)の御出になるに何故に汽船がかくも小さいのであらう。おまけに此汽船は人よりも荷物――